

明治女流文學における 人間性の解放

— 與謝野晶子をめぐって —

朴 京 薫

目 次

I. 序	3. 處女歌集「みだれ髪」
II. 本 論	1) 題名と装釘
1. 明治文壇と短歌	2) 絃情から官能の世界へ
2. 晶子とその文學の形式	3) 「神」「佛」の觀念
	III. 結論・要約

I. 序

明治の文明開化は、西歐の文明に向かって疾風の如くはしっていくうちに、女性の啓蒙と教育に大きく力を注いでいたため、長い間の封建の世に見られなかった女流文學が發生するようになった。

明治20年代には、多くの女性が小説を書き、群小女流の中から樋口一葉が大きく浮かび上がって明治初期の女流文學を形成するようになる。その後、台頭してきた女流は、與謝野晶子であって、傳統的な和歌を革新した新しい歌人としてその業績は大きい。

要するに明治時代の女流文學は、この二人の小説と詩歌に代表されるのであって、輝く大きな星のような存在とみられている。それは日本文學の近代的革命による數多くの青年作家に伍した二人が、女流的特色を強く現わした傑作であったからである。

樋口一葉は、未だその社會が表だけの開化と平等の世の中であつたために女としてはどうしてもきぬ逆境の悲哀と不如意の苦惱を寫實していたのであり、そこに積極的な自我の覺醒が叫ばれなかつたことで、一葉は、「古い日本の最後の女」とも評されているのである。

その古い女の悲しみを寫實的に描いた作品は讀者にはどうひびいたのであつたらうか。一葉の死後、約10年ほどして一葉の作品を読んだ一少女は、

「少くとも私は十四、五の頃、一葉を初めて讀んだ頃から、婦人の地位に目を覺まされた氣がします。」¹⁾

とっている。これは後の有名な女流社會評論家となった、山川菊榮(1890.11～1980.11)の言ったことである。一葉の作品に描かれる内容は、一葉がそこに安住している意味ではないのであって、一葉の告發とも反抗とも見るべきものである場合、これは女性の問題意識の提示であったとは言えるのであろう。

一葉が女の悲しみを自畫像の如く歎き訴えて死亡した後、約5年ほどの間をおいて與謝野晶子は自ら女性を讚美し、自我に充實する奔放な戀愛の歡喜を歌いあげている。

晶子の短歌に歌われる、自由奔放な戀愛の詩は、傳統的和歌の近代的革新であったと見られるもので、和歌では見ることのできなかつた人間本位な官能の世界の表出を大胆に歌いあげているのである。これは既成道徳には、抵抗的衝擊となっている。

わずか5年ほどの期間に一葉から晶子への變り方は大きいものであって、時代的にもそれは變動期を迎えていたせわしい時期であった。『文學界』を中心とする浪漫主義の精神的戀愛至上は、もはや

「急激な自我至上の極端な個人主義に變貌し、自我の充足を唯一絶對的理想とするに至った。(後略)」²⁾

という、いわゆる『明星』の官能的戀愛至上を唱える時代と變っていくのであった。

こういう時代的な動きに敏感に立ち合つた晶子の文學的才能は、思うままの奔放な官能の解放をはばからず歌いあげるようになっていくのであった。

晶子は、その實生活においても自我をおし通して妻子のあつた與謝野鐵幹と熱烈に愛し合い結婚を成立させた自己充實の人であった。

日本の明治文學における近代的自我は、浪漫主義において強く唱えられ、全盛期を迎えているが、それは『文學界』の前期を歩み、『明星』にたどりついた後期浪漫主義でのことである。赤裸々にまで、自己を解放し大胆に自我を主張した晶子は、日本浪漫主義の形成に大きな業績を残したことになる。

こうした晶子は、その生涯を短歌制歌に、詩、小説、隨筆、評論 教育と實に廣く文化にたずさわつた仕事に従事している。しかし晶子の處女歌集「みだれ髪」を中心とした23才の處女時代の短歌は、そのすべての業績を代表しているようである。

本稿では、樋口一葉の虐げられた女の苦惱の訴えを一氣に越えた、女の美と戀愛の讚美、奔放か

1) 山川菊榮・原田伴彦の對談，“明治の女性”，「現代日本記録全集」10，筑摩，1968，p.13.

2) 吉田精一，“日本ロマンチズム”，「文學」7，岩波講座，1954，p.94.

つ官能的人間性の解放を高唱しえた、「みだれ髪」を中心に與謝野晶子をたどって行きたいと 思うのである。

Ⅱ．本 論

1. 明治文壇と短歌

明治の近代文學は、坪内逍遙、二葉亭四迷の寫實主義に始まり、まもなく尾崎紅葉が中心になって硯友社を結成、機關誌『我樂多文庫』を發刊する。この明治20年代、特に中半ともなつては、尾崎紅葉と幸田露伴の擬古典的名作が「紅露時代」を作ったりして、人口に膾炙していた。がその擬古典的、日本主義的なものに反して、近代的自我の目醒めと、内面的眞實を尊重するといった革新的氣風の文學運動がおこってきたのである。それは、北村透谷を中心とする『文學界』のロマン主義的、同人たちであった。

『文學界』は、キリスト教精神の影響によって、自我の擴充と、封建因襲の打破など、日本浪漫主義文學の先驅的な運動をなしている。當時の硯友社は文壇の支配的地位にあつたのであるが、やはり封建的なところが多くみえていたのに否定的であつたのが『文學界』であつた。樋口一葉は、『文學界』の同人ではなかつたが、それを舞台に彼女の文學は飛躍し得ている。明治26年に發刊を見た『文學界』は、特に女流文學の育成という目的もあつて、女流の多數の投稿を期待してゐたのであつたが、樋口一葉だけが生長したことになつた。『文學界』は創刊5年後の明治31年(1898)1月に廢刊となつたが、それは樋口一葉が死亡して約一年の後でもあつた。一葉死後の文壇は、

「日本の文學全体に亘る變動期に入るとともに婦人の文學的活動にも一種の低迷というべき沈滞が生じた。」³⁾

といわれるように、明治30年代に向かう變動期は、散文から詩へと移り行く夜明けのような時代であつたのである。

當時の文壇を中村光夫は、

「(前略)尾崎紅葉の未完で終つた『金色夜叉』なども新しい世相やそこから生じる若い人たちの新しい考えを敏感に取り入れていこうとする姿勢がみられます。しかし、この時代の小説は詩や評論に比べると何か決定的な作者の身振りというようなものが欠けているところがあつて、時代の第一線というわけにはいかないとありました。」

3) 宮本百合子、「文學に見る婦人像」, 新日本出版社, 1973, p.159.

といっている。つまり、30年代の初は、島崎藤村の「若菜集」(明治30年)が発表され、與謝野鐵幹の和歌革新運動の推進はついに新詩社の結成(明治32年)となった。新詩社の機關誌『明星』が發刊されたのは、1900年(明治33年)4月であるが、それは、『文學界』時代、いわゆる前期浪漫主義の後を承けて後期浪漫主義を形成していく文藝雑誌であった。

和歌革新に情熱的な與謝野鐵幹は、もと大陸への野心に燃えた闘士として、韓國に渡ったことのある多血性の人である。渡韓當初は日本語の教師として、1895年(明治28)「乙未義塾」に赴任しているが同年10月には「王妃閔氏暗殺事件」の策略に加わっていた。當日の慘事に参加はできなかったようである⁴⁾が彼も犯人の一人として廣島に護送されてまもなく放免される。それからただちに再度の渡韓をし、もう一つの策略を謀ったが水泡に歸した。それは、韓國の高宗の宮、明禮宮を焼きはらい、日本公使館に高宗を渡すことであったのである。⁵⁾

第三度目の渡韓は、1897年(明治30)であったが、彼の行跡はさだかでない。かような彼の三度にわたる渡韓の行跡からみても、いかに彼は、闘士的、野望の人であったかがうかがわれるのである。1896年の二度目の渡韓から歸った鐵幹は、『東西南北』という、詩歌集を發表した。その序には、「小生の詩は即ち小生の詩に御座候ふ。」という詩歌の獨創性を唱えて革新を旨ざすのであった。

韓山に、秋かぜ立つや、太刀なでて

われ思うこと無きにしもあらず(東西南北、1896)

韓國を背景に作ったこの詩歌集には、上の歌のような挑戦的、野望の見えるものが多く、「虎劍調」とも「虎の鐵幹」とも呼ばれた。

何かはせずに止まぬの情熱と野望の鐵幹は和歌の革新に熱をあげ、「萬葉集・古今集等の系統を脱したる國詩」である「自我獨創の詩」⁶⁾をつくることを旗印として新詩社を結成し『明星』を發刊するのである。

『明星』を中心とする青年男女の浪漫歌人とともに鐵幹の詩歌も、壯士的なものから浪漫的歌へと變って行き、ついに與謝野晶子や山川登美子などを得て近代短歌の革新に至る。

このような詩歌の革新運動と共に、當時を動かしたものに評論があった。その代表者、高山樗牛は、1901年(明治34)8月に「美的生活を論ず」を「太陽」誌に掲載している。それによると、

「何の目的ありて是の世に産出せられたるかは吾人の知る所に非ず、然れども生れたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れ

4) 矢野峰人, 「鐵幹, 晶子とその時代」彌生書房, 1983, p.52.

5) 「現代日本文學全集」15. 筑摩, 1954, p.410.

6) 「新詩社」清規十四個條から

ば本能の満足即ち是のみ。本能とは何ぞや、人性本然の要求是也。人性本然の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ。(後略)」⁷⁾

樗牛の説いている美的生活とは、情欲の満足であり、それが人間の幸福であるというのであるから、一切の既成因襲を排撃したことになっている。

このような評論は、当時の學者たちの賛否兩論的となっているし、社會的に根強く残っている封建的道德観には大衝撃となったのである。

しかし、当時の樗牛は、『太陽』の主筆として、彼の論のあるとないでは、賣行きが一萬もちがうという評判すらあった⁸⁾ というのだから、彼の「美的生活論」も、浪漫主義の指導的存在として、大いに影響を及ぼしたものと考えられる。

樗牛の「美的生活論」の發表と同年同月(1901年8月)鳳晶子の「みだれ髪」が新詩社により、出版されている。晶子の自由奔放な官能的、短歌の數々は、ほとんど、樗牛の主張する「美的生活論」に一致するものであったのである。

『明星』派の、「美的生活論」に共鳴することの大なるものとしては、與謝野鐵幹の掌中記にうかがうことができる。

「猶々高山君の美的生活論、げに我等には十年來の快論と存ぜられ候。同君の病は悲しむべし、されど病を得られしが爲に却って萬人に勝れし健全なる頭腦に復され直ちに人生の眞を悟って、如此き議論を爲し、初めて詩人らしき生涯に入られ候ふかと思へば、我等限なく嬉しく候。」⁹⁾

とのべている。樗牛の論はこのようにして晶子を中心とした『明星』派の歌風のよりどころとして、その變愛觀の一致する、大きな支柱的背景であったのである。

明治の短歌は、このような自由浪漫思潮の背景を得て、文壇的主流をなしていた小説を凌いで、浪漫主義の成立を達成するのであった。

2. 晶子とその文學の形成

與謝野晶子は、結婚後の姓名であって、もとは鳳氏であった。1878年(明治11)12月7日に生れて、1942年(昭和17)5月18日に世を去った晶子は、實に明治、大正、昭和と三代をきた女流であった。

晶子の出生地は、日本國內でも特色のある都市として、中世から、外國との交流の多かった、豪商の町、堺市である。

7) 高山樗牛, “美的生活を論ず”, 「太陽」第7卷9號, 博文館, 1901.8, p.34.

8) 吉田精一, 前掲書, p. 同.

9) 與謝野鐵幹, “掌中記”, 「明星」17, 新詩社, 1901.11, p.67.

「對明貿易を獨占して巨富をつんだ堺では、會合衆とよばれる門閥的豪商たちによる自治的な都市運営がおこなわれた。しかし、宣教師の目を見はらせ、一時は信長の武力にも對抗するほどであった堺の力…… (後略)」¹⁰⁾

という歴史的な事實から見ても、堺は、自治的、力のあるしっかりした商業都市であったことがうかがわれる。また堺は、宣教師の往來も多かったところで、彼等は次のように堺を見ていたのであった。

「日本全國、當堺の町より安全なる所なく、(中略)此の町に來住すれば皆平和に生活し、諸人相和し、他人に害を加ふる者なし。(後略)」¹¹⁾

といった 平和な雰囲気、外國人が暮すにも何ら不便のない所であったようで、市民の餘裕と大様さが感じられるところがある。

「『もののはじまりみな堺』という市當局のキャツナフレーズにうたわれているように、隆達節の小唄、三味線、更紗 鐵砲など諸般の文化がここから創り出されてきた。永い歴史は生活者に誇りや自信を與える。明治の堺の人々が一方で傳統の壓迫に逼塞していたとしても、同時に近代の途上で新しいものをみ出す潜在力を持っていたことは否めない。」¹²⁾

堺は、幕藩以來の壓迫により、中世から近世初頭までのその輝かしい歴史は、明治の世にはもう保守的舊習の強い町となっていたようである。しかし昔からの自負心と自信は持ち續けられた一種の風土として堺の市民につながっていたのであったと考えられる。

晶子の父 宗七は駿河屋という菓子商の二代目として、商人ながら國漢文に造詣があり讀書を好み、俳句や畫も描いた趣味人であって、書庫には相當の古典書が備置されていたといわれる。

晶子の誕生は、女の子であったがために父には喜こばれず、母もそれを氣遣って病になり晶子は乳母と共に叔母に預けられるのであった。晶子は三歳になって、弟が生れてからやっと家にもどることができるのである。しかし父と晶子の間柄はあまり良くはなかったし母も先妻の二人娘を晶子より大事にしたこともあって晶子の心の中には一種のひがみが成長してその性格に影響されたとみるのも不自然ではないと思われる。即ち、

10) 笠原一男「日本史史料集」山川出版、1979、p.97.

11) 上掲書、p.96.

これは「耶蘇會士日本通信書」にある、ローマ法皇へ送った報告書の一部

12) 新聞進一、「晶子の青春」,「日本近代文學大系」17. 角川書店、1971、p.8.

「晶子に見られる意表外の言動は、自分の存在を主張しようとする、愛されざる者の抵抗ではなかったらうか。晶子が家庭の外に、堺の街の文學運動に憩ひの場を、或は慰めの場を見つけて入って行ったのは當然の成行であろう。」¹³⁾

と見られなくもない。晶子の後の歌にみえる自己誇示や自我の尊重などは、そうした男尊女卑の家庭の空気が作りだした、我の強さと抵抗心の現れであったとも考えられる。

晶子は12才から結婚していった姉の場を守って店を手傳った。堺女學校に通いながら店を手傳

「商賣の暇に、琴を習うとか、祖母や父の書棚から、源氏大鏡榮華八代集の類を引き出し(中略)鷗外先生の『棚草紙』後には『めざまし草』それから戸川秋骨様などの『文學界』、紅葉様、露伴様一葉様などの小説(中略)を解らぬながら拜見するのが一番楽しみに存じました。」¹⁴⁾

このように晶子は文學少女として、本を好んで読みふけたことがわかる。

また晶子は、父とのしこりはあっても、店を手傳ってはいても、經濟的に恵まれていて欲しい本は自由に買い入れて讀める裕福な娘であったのである。それは士族の娘と違った精神的な自由と經濟的自由とがある程度得られたということにもなる。

晶子は古典に對しては特に憧れが強い人であって、その古典的素養は、主にこの時分の父の書庫の中で讀みとったものである。晶子の古典的素養を一葉のと照り合わせてみると、一葉は七つの年から草双紙の英雄豪傑傳の耽讀を初めに傳統的和歌、物語、隨筆など散文の世界に廣くその教養を修めていって、「完全な消化とその自在な活用を果たした」¹⁵⁾とみられている。ところが晶子は、古典を盲目的なほどに憧れて、王朝の人に自らを置きかえるという、いわゆる「擬裝の對象としての古典への同化、古典への様式的類同化に腐心した」¹⁶⁾ような活用ぶりであったことがその歌を通してのぞける。

次に晶子の西洋の新しい詩に刺激され、影響されていたことも晶子自身の言葉を引用してうかがうことにする。

「島崎藤村氏の新しい詩が雑誌文學界に發表され、續いて幾冊かの氏の詩集が出版され、薄田葦氏が新鮮な詩を多く示されたより後のことである。私は二氏に負う所が多いのである。

13) 佐藤亮雄, 「みだれ髮攷」 修道社, 1956, p.198.

14) 與謝野晶子, “簞柑子”, 「晶子隨想集」5. 春秋社, 1968, p.120.

“簞柑子”は1906年5月～1907年2月まで四回、雑誌「明星」に連載したもの。

15) 菊田茂男, “日本の古典文學と近代女流文學”, 「國文學; 解釋と鑑賞」, 至文堂, 1972.3, p.77.

16) 上掲論文, p. 同

(中略)私は詩が解るようになっていながら、また相當に日本語を多く知りながら表現する所は泣菫氏の言葉使ひであり、藤村氏の模倣に過ぎなかった。(後略)¹⁷⁾

と述べているように彼女の詩や短歌には、藤村と泣菫が大きな影響として反映されている。晶子の處女作「春月」が、浪華青年文學會(後、關西青年文學會)の機關誌「よしあし草」に發表されているのをみると、

別れて長き君とわれ
今宵あひ見し嬉しさを
汲みてもつきぬうま酒に
薄くれないの染めいでし
君が片頬にびんの毛の
春風ゆるくそよぐかな、¹⁸⁾

この初作の詩は、藤村の「若菜集」(1897)の調子と類似しているようにみえる。次の藤村の詩は「若菜集」の中の一部であるが、その雰囲気においても兩歌は實に良く似ている。

たれかおもはむ鶯の
涙もこほる冬の日
若き命は春の夜の
花にうつろふ夢の間と
あゝよしさらば美酒に
うたひあかさん春の夜を¹⁹⁾

晶子は後には詩よりも短歌において、その才能が發揮されるのであるが、彼女の短歌の處女作發表は、上記の詩發表より、數年先に既に『文藝俱樂部』になされていたのがみられる。題目は「蟲聲入琴」というもので、

露しけき葎が宿の琴の音に
秋を添えたる鈴蟲のこゑ²⁰⁾

17) 與謝野晶子, “あとがき”, 「與謝野晶子歌集」, 岩波文庫, 1984, pp.297 ~ 298.

18) 鳳晶子, “春月”, 「よしあし草」11. 關西青年文學會, 1899.2, p.34.

19) 島崎藤村, “春;たれかおもはむ”, 「日本詩人全集」1. 新潮社, 1967, p.51.

20) 晶子, “蟲聲入琴”, 「文藝俱樂部」博文館, 1895.9, p.218.

という、舊派的、抒情であった。彼女の年18才の時であったが、当時、24才の樋口一葉は、短命の25才を一年ひかえた、「奇蹟的期間」を作っていた時で、晶子の発表した『文藝倶楽部』1895年9月號には、後有名になった「にぎりえ」の短篇を、26ページに亘って(p.116～142)発表していたのである。一葉には『文學界』に「たけくらべ」をも連載していた時であって、明治の女流としての第一人者たる決定的な傑作の續出期にあっていたのである。

樋口一葉の名作と共に當時の權威ある文藝雑誌の片隅には、「晶子」と署名した上記の一首も顔をだしていたということは何と興味ある出會いであつたのであろう。

後に晶子の和歌は、舊派的抒情から抜けでて西洋の思潮や詩畫の合流した感のある新しい短歌の創造となり明治の歌壇を一時風靡して革新するのであるが、それは一葉の小説と共に明治の女流文學を代表する傑作であつた。

要するに晶子は、古典的情趣への傾倒による文學的素養に、近代詩の藤村や泣菫の影響、西洋美術からの新しい感覺などの合流したものを作りあげているとおもわれる。

もう一つ晶子の天性的情熱、それは、鐵幹との出會いによって熱烈な戀愛となり、晶子の文學的才能をよりよく發揮させるものとなつたとみられる。

鐵幹との初對面は、1900年8月上旬であつたが、それ以來晶子は自分を罪の子といい、鐵幹に傾倒していた。同年11月4日には京都で鐵幹、晶子、登美子が永觀堂の紅葉鑑賞の旅をし、粟田山で宿泊する。この時登美子は父母のきめた結婚に應ずる由を発表する。晶子はライバルではあつたが登美子を力づけて

星の子あまりによわし袂あげて
魔にも鬼にも勝たんといへな

という封建道徳の打破を強いるのである。明くる年の1901年1月10日頃粟田山で鐵幹と晶子、二人だけの會合が實現されるが、この會合により、晶子と鐵幹の戀愛は確固としてきた。鐵幹は龍野(妻)と離婚し晶子は家出をして鐵幹のところを上京してきている。それからの晶子の歌は特性に満ちた奇抜なものとなり一年足らずの期間に、「みだれ髪」のほとんどの歌が作られるという多作をなし、その歌風を成立させるようになったのである。

3. 「みだれ髪」

1) 題名と装釘

「みだれ髪」は、1901年8月に出版された新しい日本の短歌として、20世紀の初年を飾りつつ、または日本の浪漫主義文學を代表しつつ生れ出たものである。

晶子自身は、後年處女作のこの「みだれ髪」を嫌って、

「何分お恥かしいものにて、今あれを見ると、頬の赤らむのを覚えます。ほんとうに泣菫氏

の影響のみで出来た集といってもよろしいのです。唯残念なのはああした歌風が流行したことで、主人なども私の影響を受け、ずい分わたくしのものによく似た歌をよみました。(後略)²¹⁾

と語っている。しかしすでに晶子の師であり恋人であった鐵幹さえも晶子の歌風をまねていたというほどに晶子の歌は大流行となり、その歌風は若い歌人たちに新鮮な魅力となっていたことがわかる。矢野峰人(1893-)も「與謝野晶子という名は年少のわれわれに對してもすでに異常な魅力をもって…」²²⁾ いたといっている。

「みだれ髪」は、晶子自身の嫌悪にもかかわらず、その時代を代表した文學となったのである。

まずその装釘から見ていくことにするが、縦19センチに横8.5センチという一種變った細長い小型の詩集の「みだれ髪」は、その形から他の出版物と違った風變りのものである。

その表紙の繪は、ハートの中に髪をいっぱい亂して顔だけを妖艶に現わしている少女、そのハートをキューピットの戀の矢が貫ぬいていて、矢の先からは花が三輪咲き、たれさがっている。ハートの先からはしたたる血が「みだれ髪」と書いている。

この奇抜な魅力にみちた西洋畫を描いた青年畫家は、藤島武二で、

「當年三十六才、二十九年から東京美術學校(現東京藝大)助教授、白馬會會員として活躍中の新進畫家…」²³⁾

であって、彼は當時西洋で流行していた Art Nouveau (アール・ヌーヴォー) の畫風を持って『明星』の表紙も描きほとんど専屬の存在であった。

アール・ヌーヴォー畫風の當時の様子を、日夏耿之介は、

「本とアール・ヌーヴォーという畫風は巴里に發生したとする説と、巴里の影響で何米利加に發したとする説とがある。何れにしても、三十年代中晩數年間は悉有ゆる雑誌單行本のデザインがこのデコラティヴな太い線を効果的にかこんだ畫風一色で塗りつぶされたのである。」²⁴⁾

とのべている。明治30年代の浪漫主義文學は、かような西洋の先端を行く繪畫との出會いにより、ロマンチックな斬新さを見せていたのである。「みだれ髪」はまずその装釘から新しさと浪漫性をみせて發行され 内容においても西洋畫的、王朝文學的な雰圍氣にしたものとなっている。

次に「みだれ髪」の題名に關しては、與謝野鐵幹が晶子におくった次の歌によるものといわれている。

21) 與謝野寛・晶子・吉田精一記(對談)，“明星の思ひ出”，「國語と國文學」11-8，東京帝國大學國文學研究室，1934.8，p.1306.

22) 矢野峰人「前掲書」p.192.

23) 新聞進一，「與謝野晶子」，樓楓社，1982，p.44.

24) 日夏耿之介，“みだれ髪の浪漫的感覺”，「明治文學全集」51 筑摩，1970，p.370.

秋風にふさはしき名をまいらせむ
そぞろ心の亂れ髪の君（明星8號、1900.11）

上の歌の發表以來、新詩社の同人たちには晶子は「みだれ髪の君」になっていたのであった。晶子自身は歌集「みだれ髪」が發表されるまでは歌にして詠んだことはなかった。しかし彼女は自身の署名として「みだれ髪」を用いている。『明星』11號に發表した歌には、「晶子」の代りに「みだれ髪」と署名をしているのが見られる。²⁵⁾

また實際においても晶子の黒髪は常にいくすじかは亂れていたようで、鐵幹はそれに印象づけられていたであろうという推測もなされている。

晶子は、「みだれ髪」の中に初めて、

くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪
かつおもひみだれおもひみだるる

というみだれ髪を代表するような歌をはじめとして数々の黒髪やそのみだれを歌っている。芳賀徹教授の「みだれ髪の系譜」には、

「縦に新古今の歌と天明俳諧のみだれ髪の血統をうけつぎながらも、それに劣らぬほど強く深く同時代ヨーロッパの藝術運動の横波を浴びていたのにちがいない。」²⁶⁾

とのべられ、王朝の和泉式部や藤原定家、待賢門院堀河などの「黒髪の亂れ」の歌が次の代の與謝蕪村につがれて

枕する春の流れやみだれ髪

という「水の流れと女人の黒髪のうねり」とをマッチさせるものとなり、一世紀後の晶子のみだれ髪に、うけつがれた一面がとかれている。與謝野晶子も

「蕪村は王潮の言葉をたくさんつかっておりますが、決して王朝をそのまま歌ったのではなく、天明の京都を美しく傳えております。それは、蕪村が王朝と天明の京都との間に血のかよっているものをとって来たからでしょう。」²⁷⁾

25) 與謝野晶子, “落紅”「明星」11. 新詩社, 1901.2, p.96.

26) 芳賀徹, 「みだれ髪の系譜」美術公論社, 1981, p.28.

27) 與謝野晶子, “叢柑子”, 前掲書, p.128.

と「菽柑子」の中で話している。これは王朝との傳統的流れを意味していることであって、晶子においても王朝と天明と明治の間に血を通わせていたとは當然、その古典的情趣の現れからしてもいえそうである。

「みだれ髪」の題名は、晶子に詠みおくれた鐵幹の意味するものをこえて遠く深く王朝や天明の趣きを藏したものとなったのではなからうかとも思われるのである。

2) 絃情から官能の世界へ

「みだれ髪」に收められる短歌の大部分は戀愛の大胆な自己表白と華麗な官能美と繊細な心情告白である。しかしそういう歌の現れ始めたのは、鐵幹との戀愛のめばえからであってすくなくとも1900年8月以後のことになる。

(154)²⁸⁾

小百合さく小草がなかに君まてば
野末にはひて虹あらはれぬ(明33.6)

(237)

野茨をりて髪にかざし手にもとり
永き日野邊に君まちわびぬ(33.6)

上の二首はともに、漠然とした戀人を待ちわびる少女の慕情と、天真爛漫な希望と浪漫の歌われる情趣的な歌である。

(368)

花にそむきダビデの歌を誦せむには
あまりに若き我身とぞ思ふ(33.6)

この歌は上記二首の歌と同月のものではあるが、少女的な夢から抜けでた戀愛の謳歌が見えはじめるのである。

戀愛にそむいて、ダビデのキリスト教的詩を暗誦するには、私にはあまりに若い青春である、といった内容で、宗教的なものに対する否定である。それに、舊道德の束縛からも自由になり、人間的な戀愛をのぞむ青春の若さのみなごりを強く現わしていると思われる。

この歌において、はじめて晶子は自己の誇示とも自己の充足ともみえる強みを見せている。

(161)

ころみにわかき唇ふれて見れば
冷かなるよしら蓮の露(33.8)

28) 歌の頭につけた数字は「みだれ髪」初版本の通し番號で便宜と参考のためにつけておくことにした。歌の終りの()内は初出の明治年月である。

この歌は、少女的、純潔と戀愛以前の感傷のようなものにみえるが、一面、蓮の花にとまる淨い露に口づけてみる感覺の官能の表出がみえはじめたようにみられるのである。

(373)

病みませるうなじに織きかひな捲きて
 熱にかわける御口を吸はむ(33.9)

この歌の動機は、1900年(明治33年)8月2日から19日まで、關西に「文學談話會」の名目で旅行した與謝野鐵幹との出会いにはじまる。當時、初対面をした鐵幹と晶子、それから友の山川登美子の三人は、5回にわたって共に會っている。それ以來晶子は鐵幹を慕わしく思うようになるがたまたま旅行から歸った鐵幹が、『明星』の編輯などで過勞になり寝込んだことを聞き、見舞に送った歌がこれである。その頃までは鐵幹とは深入りした戀愛ではなかったのであるが、晶子は想像の世界を造りだして、慕わしい氣持をそえているのであろう。實體驗のなかつた晶子としてはあまりに大胆で官能的表現となっている。これは晶子の歌の中でも代表的なものの一つである。

これより先は、かような大胆かつ奔放な歌が、よく歌われるようになり世を眩目させるのであった。

(26)

やは肌のあつき血汐にふれも見で
 さびしからずや道を説く君(33.10)

(362)

罪おほき男こらせと肌きよく
 黒髪ながくつくられし我(34.1)

(68)

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬ
 ここなる花の紅ぞ濃き(34.3)

(352)

道を云はず後を思はず名を問はず
 ここに戀ひ戀ふ君と我と見る(34.3)

(321)

春みじかし何に不滅の命ぞと
 ちからある乳を手にしぐらせぬ(34.5)

(320)

いとせめてもゆるがままにもえしめよ
斯くぞ覺ゆる暮れてゆく春 (34.7)

(9)

臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ
春のおもひのさかりの命 (不明)

上に並べた歌は、特に有名かつ代表的なものを選んでみたのであるが、その外にも数多くの情熱的奔放な歌があることは言うまでもない。

「やは肌の」の歌は、晶子自身が後に口語譯をしているように、世の道學者たちに向かい、女の情熱にふれてもみないで寂しくはないのであるか、²⁹⁾と呼びかけるような歌であって實に世の中を驚かせたものであった。

次の「春みじかし」の歌にしても、人生における青春は短いものであり、世のどこにも不滅の生命というものはないのである。力にみちた私の生命力ある乳をにぎらせるのである、という露骨で大胆な發想である。

この二首は、制作年代から見ると數個月を前後してつくっているのであるが、そこにあるモチーフは、兩方ともに既成道徳への抵抗的、對立とみるべきであろう。これは「舊道徳の心膽を寒からしめた」³⁰⁾のものであり、「女性でありながら男性に身を換はして女体讚美をやれる(中略)超女性的と思へる程飛躍した」³¹⁾ものとして、世間をはばかりず大胆に表現しているのである。

「罪おほき」の歌も、長い封建の社會で女性に蔑視の罪をおかした男性をこらしめよと自分は、うるわしく生れてきたのだという一種の誇示であり、自己讚美でもある。女性の美を堂々と歌いあげた、男性への抵抗とみられる。

「道を云はず」は、戀愛至上を歌ったもので、優柔不斷な男性に迫るような、または男性に抵抗を見せていたその反面の一途な情熱的、戀愛至上を高唱している。世のすべての制壓にも名聲にも來世にも一切こだわることなく君と私の戀愛だけが存在するのである。「臙脂色は」の歌では、青春の情熱を、その血のゆらぎを、だれに語りだれにゆだねるべきであろうかと、赤裸々な自己の持って生れた熱情を表出しているのである。このように自己をためらわずして表現し得た歌人は、それまでには見あたらず、晶子が最初であったのである。自然主義の花袋が「蒲團」(明治40)を書いて自分を露出したのは6年後のことであった。

次の「いとせめて」の歌では、すぎていく青春の流れを思うとき、せめてもえあがる情熱をば、思うままに燃えさせよう。という情熱の燃焼を決意するところである。

29) 與謝野晶子, “私の初期の詩”, 「與謝野晶子選集」5. 前掲書, p.145.

30) 小田切秀雄, “みだれ髮論: 近代短歌史の光榮”, 「近代短歌」, 有精堂, 1973, p.86.

31) 岡山巖, “晶子と現代女流歌人”, 「短歌研究」, 日本短歌社, 1951.5, p.20.

「乳ぶさおさへ」の歌は、あえて神秘のとぼり(性の秘密)をそとけて入ってみれば、その紅(戀)は、きれいなすばらしいものであった。ということで、空想をこらした象徴的な、性の解放を歌ったものとみられる。しかし歌全体からの雰囲気からはいかにも純粹な少女の西洋的裸像の淨らかさが感じられもするのである。そこには肉体的露骨な低俗的表現はない。どこまでも美の幻想化された飛翔や人間性の禮讚であるところに晶子の歌の特色がみられる。

以上、初期の情趣的慕情から官能の世界へと急變していった晶子の歌を例挙してみたつもりである。特に自由奔放な歌において、晶子は、そこにさまざまな心像を描いていくうちに、一貫する自己讚美と戀愛至上を謳歌しているのであった。女性の讚美ということも奔放なる官能的戀愛の表出も、それまでの和歌では考えられないものであったから、晶子の「みだれ髪」は、實に舊道徳を信奉している學者たちの「心胆を寒からしめ」た因襲への抵抗であったとみることができると思うのである。

晶子の表現が露骨でかつ強烈であればあるほど、因襲への抵抗は強く現れることになり、自己愛や人間性の解放もより強く叫ばれることになると思われる。

しかし一貫する情熱の赤裸々な表出に、歳幹との現實における熱烈な戀愛があったからの眞實性がうかがわれることはみのがせないことである。

3) 「神」「佛」の觀念

「みだれ髪」に收められた歌の中には、神や佛が多く詠まれている。まず「神」の見える歌を數首選んでみることにする。

(8)

紫にもみうらにはふみだれ函を
かくしてわづらふ宵の春の神 (34.3)

(16)

今はゆかむさらばといひし夜の神
御裾さはりてわが髪ぬれぬ (34.3)

(40)

みだれごちまどひごち類なる
百合ふむ神に乳おほひあへず (不明)

(62)

ふさひ知らぬ新婦がかざすしら萩に
今宵の神のそと片笑みし (不明)

上の歌の中の「宵の春の神」、「夜の神」、「百合ふむ神」、「今宵の神」などの外にも、數知れ

ぬ程の多くのことに「神」をつけているのが「みだれ髪」の特徴の一つである。いわゆる晶子の歌における神は「原始的なる意味の汎神論的神」³²⁾ということで、すべてのものにそれを司る神があるというふうにもみられたり人格化して戀人に比喩したりしている。

(8)の「宵の春の神」は、春の宵を司る神という意味で自分のぬいでおいた着物の紅い裏が宵の暗がりの中でも紫色(戀の色)になまめかしく見える。宵の神もさすがに紫色だけはかくしきれずにわずらっているのだということである。神を人間的にみて、特に春の神という、象徴的青春の神をロマンチックな紫色の戀の色にとまどわせる発想は、晶子の特色とするところである。

(16)の「夜の神」も同じようにとられるが、ここでは戀人の鐵幹を比喩しているともみられるのである。

夜が明けて、立ち去ろうとする夜の神の裾が自分にふれて、悲しくなり泣いた涙が黒髪をぬらしたのである。これは王朝時代のきぬぎぬの別れを思わせる空想的な歌である。しかし現實に 1901年 1月頃、粟田山で、鐵幹と密かに二人だけの再會があり「二夜妻」のあとの別れがあったことを思えば、その別れの悲しさは空想的王朝趣味だけではなかったところの現實の晶子の痛ましい心情であったことが想像される。また夜の神にたとえた鐵幹(戀人)を歌っていることもあわせて 察知されるのである。

(40)の「百合ふむ神」も鐵幹を比喩したものであろうが、この歌の全体から匂いでる西洋的 神の姿は、裸像を歌ったにしても不自然なところのない一幅の繪のように見える。

これは、戀に陶醉した少女が、「百合ふむ神」の前にたつて、あまりの熱中さに自己の身なりなどかえりみる餘裕もないのである。それで乳房もおおうことができず恍惚として神の前にただ立たずんでいるだけの姿を歌ったもので、「百合ふむ神」は鐵幹のことであり、空想と實際の戀情が歌になっているとおもわれる。

先にも述べたように、西歐の尖端的繪畫の流行を取り入れて盛んに應用していた當時のアーヌボー風の裸像などに影響されている晶子の西歐的繪畫的感覚がここにのぞかれるのである。

(62)の「今宵の神」は晶子の花嫁姿の髪にかざした白萩の花を見て、顔を横に笑っている 鐵幹のことである。情熱的な晶子には白萩の花はにあわない花であったからである。

晶子は自分の別名の白萩は自身には似合わないものであることを歌い、鐵幹もそれを知っていたということであるが、ここでは鐵幹を宵の神と呼んでいるのがおもしろい。

鐵幹が神に比喩されているのは晶子の歌だけでなく、『明星』の歌人たちによっても歌われていたのであり、實際にもそうした存在として君臨していたようである。

32) 日夏耿え介, 前掲論文, p.372.

こゑあげてよふにまどひぬ星の世に
小百合しら萩もつ神は一つ³³⁾

この歌は『明星』派の山川登美子が歌ったものであるが、小百合は登美子の本人でありしら萩はもちろん晶子をいっているし、一つの神は、鐵幹のことである。

當時は、鐵幹をとりかこむ『明星』派の女流歌人たちが、鐵幹を神の如く尊敬し歌の指導を受けていたのである。勝本清一郎は、このような『明星』派を、

「新詩社は正常の文學團體というよりも、それはたしかに一種の淫祠邪教だったのだ…」³⁴⁾

といている。しかし淫祠邪教的なのであったからこそ「生命力ある文學運動」がなすとげられたものであることも認めてはいる。

『文學界』での神は、キリスト教的宗教であったものが『明星』になっては全く宗教的なものから離れた人間的な神となっている。

次は、「佛」や若い僧に對する歌である。

(229)
うらわかき僧よびさます春の窓
ふり袖ふれて經くづれきぬ (34.5)

(120)
額しろき聖よ見ずや夕ぐれを
海棠に立つ春夢見姿 (34.7)

(121)
笛の音に法華經うつす手をとどめ
ひそめし眉よまだうら若き (33.9)

(150)
まどひなくて經ずする我と見たまふか
下品の佛上品の佛 (34.3)

33) 山川登美子, “紅鷺”「明星」11, 前掲雑誌, p.54.

34) 柳田泉・藤本清一郎・和田芳恵の對談; “『文學界』から『明星』へ: 一葉・藤村・晶子を中心に”, 「文學」26 岩波書店, 1959.5, p.106.

(20)

經はにがし春のゆうべを奥の院の
二十五菩薩歌うけたまへ (34.3)

(36)

御相いとどしたしみやすきなつかしき
若葉木立の中の廬遮那佛 (不明)

まず若い僧に對しては晶子は乙女を取り合わせてロマン的に描くのが巧である。

(229)の「うらわかき」も若い僧のいねむりを醒ます妙令の娘の姿を描いたものであって、佛門の僧を呼びかけるものである。

(120)の「額しろき」も同じく、聖よ、は若い僧のことであり、海棠の花の咲く春の夕に花をたのしむの娘の姿を想像させて、人間的な呼びかけをしているのである。

(121)の「笛の音に」にしても、(150)の「まどひなくて」においても、共に若い僧の人間の感受性からの動搖を描いているのである。

(150)においては寧ろ極樂淨土の佛たちに對し、人間を洞察し得ぬ無能なり不信感といったものをもらし追求しているようにもみられるのである。

かように佛門の若い僧を誘惑するかのように、また反抗的に振舞わせたりすることは、宗教的または道徳的にも許しがたいものである。しかしどこまでも人間主義的自己への充實をはかっている點において、それは既成概念に對する打破的抵抗とみるべきであろう。

(20)の「經はにがし」においても、佛にお經のかわりに、人間の戀愛の歌をすすめているのである。

(36)の「御相いとど」は、鎌倉の大佛を親しみのあるなつかしい人と見た歌であるが、「みだれ髪」發表後、「戀衣」(1905.1)に發表した、

鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は
美男におはす夏木立かな (戀衣)

の原形としてみられているもので兩歌の内容は同じ發想である。このように佛を人間化して、なつかしく、親しみやすく、美男と見ているのに對して、伊藤左千夫は、「低質的だ」³⁵⁾と酷評をしている。しかし、晶子は、つきることのない一途な人間性の肯定に執着していたのであったから、世のすべてに人間的なものを見いだそうしていたのである。神や佛に對しても、絶對的尊嚴性はなく、人間的に親しみのある存在として、歌われているのである。

35) 伊藤左千夫, “與謝野晶子を評す”, 「左千夫集」6. 岩波書店, 1977, p.282.

晶子は、「宗教的というのは藝術的に同じ」³⁶⁾ものといっている。彼女の「神」や「佛」は彼女の歌の中に藝術として永遠に生き続けることになるのであろう。

Ⅲ. 結論・要約

これまで明治期の二人女流のうち、その後期を飾った與謝野晶子の初期の歌集「みだれ髪」とその時代を中心に追求してきたつもりである。

近代女流文學の誕生として、樋口一葉が多くの群小女流の中から彗星の如く現れ明治20年代後半を飾って短命に世を去った後、わずか5年ほどして與謝野晶子が現れている。前者は小説を持って不遇な女性の現實を描き、後者は詩(短歌)を持って女性の美を讃え、現實と空想の交錯する戀愛の歡喜を歌ったのである。晶子の處女歌集、「みだれ髪」は明治34年の未だ封建性の多く残る時期に出た作品であったため、世の批判や悪評もあったが、晶子のその後のどの作品よりも、「みだれ髪」にその業績の比重がおかれているのは、その歌集の斬新な力強さと人間性の解放による若い青春の同感があったからであらう。

封建女性の悲哀を訴える一葉を古いといった晶子は、その悲哀の訴えに目醒めた如く、蔑視されていた女性を自ら讃美してその美に陶醉するのである。それから積極的に戀愛の官能的奔放な表現をはばからずなして、既成道德家の心胆を寒からしめている。要するに人間性の解放による封建道德への抵抗とみることができる。晶子は神や佛に對する歌の中にも、神聖な絶對性なり宗教的尊嚴性を認めるのではなく、すべて人格化してしまうのである。戀人にたとえな神や佛を美男とみるなつかしき對象などは、それまでに見ることのできなかつた奇抜な發想であった。

そのような晶子の「みだれ髪」の發表は、まず社會を瞠目させたのであり、若い青年男女には斬新な刺激となったのである。

當時の文藝思潮としては、高山樗牛が「美的生活を論ず」をかかげて、浪漫主義を唱え人間の幸福は本能の満足にあると主張していた西洋思潮の強く流れ込む時期であった。このような文藝思潮の背景にあってこそ、晶子は自己の戀愛生活を堂々と官能的に表出することができ、人間性を強調し得たのである。

次は晶子という人である。彼女の生育地、堺は中世から自立的豪商の町で、餘裕のある日本唯一の貿易都市であった風土的環境に、經濟的餘裕のある富商の家に育った、家庭的環境、それから晶子自身の持って生れた先天的情熱の強烈さと才能、といったものが、彼女の生活や文學に大きく働いたことは重要な事實である。與謝野晶子の藝術はそうした環境と個性から生れてたともいえるからである。

そうした與謝野晶子の歌の背景には、もう一つの強い力があつたのであるが、それは與謝野鐵幹

36) 與謝野晶子、「與謝野晶子全集」10, 改造社, 1959, p.349.

との熱烈な戀愛と彼の指導的後援であった。彼との戀愛はほとんど歌に現れ、神や佛をも人間視する人間本位の戀愛至上歌となったのである。特に晶子の古典的憧れは和歌の古典の活用というのではなく、平安朝時代の宮廷貴族たちの、「おおらかでしどけなく、色好みを競いスキャンダルなどおそれない」³⁷⁾ といった原氏物語的情趣に自身をおきかえる擬裝的なものであったために、西洋の裸像的浪漫主義との出會いによって、より官能的浪漫の奔放性をみせるようになったと見られる。

數千年の傳統を持ち續けてきた日本の和歌は、「みだれ髪」に至って、その花鳥諷詠は人間本位的戀愛至上の歌となり、近代短歌として革新誕生したといえる。

當時代の男性の作家たちも未だはばかって表現し得なかった赤裸々な官能の世界を與謝野晶子は堂々と表出して人間性を解放しているが、これはやがて雑誌『青鞜』を中心に「新しい女」を旨とした女流文學の結社にも源流的なものであったといえるであろう。

37) 奥野健男, “女流の日本的特質”, 『國文學: 解釋と教材の研究』21-9, 至文堂, 1976.7, p.11.

國文抄錄

明治 女流文學에 있어서의 人間性 解放

— 與謝野晶子を 中心으로 —

朴 京 薰

日本近代女流文學에 있어서 明治期를 훑어보면 樋口一葉와 與謝野晶子 두 作家가 크게 臺頭된다.

樋口一葉의 小說이 虐待받는 封建的 女人의 悲哀를 描寫 呼訴했던 것이라면 與謝野晶子의 短歌는 女人의 讚揚이고 사랑의 歡喜이며 人間性의 解放이었다고 하겠다. 즉 日本浪漫主義文學의 代表的인 存在로서 아무도 노래한 적이 없는 自由奔放한 官能의 世界를 赤裸裸하게 表白한 것이다. 그것은 封建的 舊道德에 대한 抵抗이며, 人間性의 尊重이라고 볼 수가 있는 것이다.

與謝野晶子의 處女歌集「みだれ髪」는 그와 같은 내용을 지니고 있어 어느 한 首에도 人間을 다루지 않은 것은 거의 없다.

그와 같이 人間을 本位로 하고 있는 그의 短歌에는 神과 佛像 또는 젊은 僧에 대한 것이 많이 읊어져 있는데, 그 神 또는 佛像을 宗教的인 神聖함이나 尊嚴性을 지닌 것이 아니고, 人間과 同等한 立場에서 다루어지는 것이었다.

이와 같은 그 時代의 浪漫主義 思潮에 힘입어, 舊制度를 無視하고 새로운 西洋的 自由로운 風調의 도입과 傳統的 王朝의 趣向을 交錯시켜 近代短歌로 革新을 했던 것이다.

當時, 1901年이라는 明治30年代는 半封建的 體制 속에서 아직도 人間性의 解放이란 理解하기 힘든 時期로서 與謝野晶子의 歌集「みだれ髪」는 相當한 物議를 빚기도 했다.

與謝野晶子가 이와 같은 短歌를 두려움없이 堂堂하게 制作 發表했던 背景을 다음과 같은 觀點에서 分析해 보았다.

먼저 文藝思潮의 趨勢로 浪漫主義思潮가 強하게 高山樗牛에 의하여 提唱되었던 時代的 背景과, 作家 自身の 出生成長地의 特異성과 그 自身の 情熱的 性品, 그리고 家庭環境을 들어 보았다. 또한 端歌革新에 크게 공헌한 與謝野鐵幹을 스승으로 하는 同時에 熱烈한 戀愛를 하게 되었던 사실 등이다.

그와 같은 여러 與件의 背後를 추구해 보았을때 그의 特異한 短歌의 出現을 수궁할 수 있을 것 같다.

明治中半期, 浪漫主義文學의 成立을 詩歌文學이 이룩했던 것은 日本近代文學에 있어서도 特色的인 事實이라고 보겠다. 特히 與謝野晶子의 古今에 없었던 異色의 短歌는 女性의 精神과 肉體를 解放시키는 近代的인 發想이었으며, 中古時代의 女流의 特色과 雅趣 또한 그 속에 짙은 色彩를 나타내고 있는 것이다.

Summary

Freedom of Human Nature in the Poetry of Yosano Akiko
among Meiji Period Women Writers

Park Kyong-hoon

Yosano Akiko's collection of poetry "Midaregami" was published in 1901, to the astonishment of the society of that time. This was a revitalization of the original Japanese Waka style poetry. She composed her poems (Tanka) by combining 19th Century European Romanticism with Japanese Heian Period aristocratic romance literature, expressing the heights of human romantic feelings.

As Japanese society at that time was still in a state of semifeudalism, she so openly and frankly expressed such feminine feelings of love, that the established scholars and authorities of national ethics were aroused and angered. If we analyze her poems we find that the major characteristic to be found is the constant presence of expressions of humanism and love. Secondly, we find her poems often deal with God and Buddha, however they are not given the usual elevated religious status nor awesomeness commonly found, but are given more human characteristics and are shown in the position of a lover. Buddha is also shown with the quality of manly beauty.

In this way we are shown the human nature of God and Buddha, so that the Ecstatic feelings of love which a woman possesses could be openly expressed rather than suppressed by the traditional feudalistic values of the society in which she lived. We should see this as the value of human feelings in the poetry of Yosano Akiko.